

## <共同研究報告>編集者大橋乙羽

著者	坪内 祐三
雑誌名	日本研究：国際日本文化研究センター紀要
巻	13
ページ	77-87
発行年	1996-03-31
その他の言語のタイトル	The editor OHASHI Otowa
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006194">http://doi.org/10.15055/00006194</a>

〈共同研究報告〉

編集者大橋乙羽

明治を代表する出版社博文館の歴史を語る上で忘れてはいけない人物に、同館の創業者大橋佐平の女婿（長女時子の婿）である乙羽大橋又太郎（旧姓渡部又太郎）がいる。博文館入館後わずか五年数ヵ月で不幸にも病に斃れた彼は、まだまだ、その持つ能力を十分に使い切れずに生涯を終えてしまった。しかしその短い期間でなした彼の、博文館への、ひいてはその後の我が国の出版文化への貢献は多大なものがあった。にもかかわらず彼の名は今、ほとんど忘れ去られている。かろうじて記憶されているとしても、それは編集者としてではなく、硯友社の作家大橋乙羽としてであろう。そ

の小説の代表作は現在、筑摩書房の「明治文學全集」第二十二巻『硯友社文學集』に収められ手軽に読むことができる（「露小袖」明治二十三年及び「霜夜の虫」明治二十四年）。とは言うものの作家としての彼は、その死に際して彼の親友高山林次郎（樗牛）も「小説家としての子は素より紅葉露伴の諸先輩に及ぶべくもあらず、詩歌を能くし、俳諧に巧なりしが、是れによりて名を後世に留めむには尙ほ多大の修養を要したりき」（『太陽』明治三十四年七月五日号）と書いているように、しよせん二流の存在でしかなかった。

坪内祐三

下の小文において私は、そのことを明らかにして行きたい。つまり編集者大橋乙羽の復権を試みることにしたい。

周知のように、明治末年から大正期の出版ジャーナリズムを代表する名編集者は、『中央公論』の滝田樗陰であるが、その前の時代を代表する編集者が、実は、大橋乙羽だった。と言うよりも、近代日本の出版世界で、職能としての編集者を確立した最初の人物が彼だった。

ではその職能とは具体的にどのようなものであったのだろうか。

その前に、明治二十七年十二月博文館に入館するまでの彼の歩みを振り返っておく

ことにしたい。彼の伝記資料としては、没後すぐに刊行された遺著『歐米小観』（博文館・明治三十四年七月）の巻末に収められた岸上操（質軒）による小伝「大橋乙羽君」と、昭和女子大学の『近代文学研究叢書』第五巻に収録されている「大橋乙羽」があり、以下、基本的に、その二つの記述に従い適宜他の資料を参照して行く。

大橋乙羽、本名渡部又太郎は、明治二（一八六九）年六月四日、現在の山形県米沢市に、旅館音羽屋を営む渡部治兵衛、かつの六男として生まれた。のちにペンネームとなる乙羽は、もちろんその旅館音羽屋の屋号にちなんだものである。

ここで二つのことに注目しておきたい。まず旅館の子であること。そして米沢という土地柄である。

旅館の子と聞いてすぐに思い出すのは、やはり彼と同じ時期に編集者（主に少年雑誌の）として活躍し、彼の没後に博文館に入館することになる『明治事物起原』の著者石井研堂である。研堂は慶応元（一八六

五）年、現在の福島県郡山市にある裕福な旅館の三男として生まれた。乱暴を承知で言い切ってしまうえば、幕末から明治初めにかけての、街道筋にあった旅館は、あらゆる新情報が飛び交う一種の情報メディアの中継地点でもあった。そういう場所に生を受けた彼らは、生まれながらにしてジャーナリスティックなセンスに磨きがかけられていった。

場所のことを問題にすると、さらに乙羽に決定的な影響を与えたのが米沢という場所である。米沢は、リストラの先駆者として最近一部で脚光を浴びている名君・上杉鷹山を生んだ土地として名高いが（乙羽には後述のように少年向けに書かれた鷹山の伝記がある）、そういう名君を生んだ背景には、百二十万石から三十万石、さらに十五万石へと石高を減らされていった旧米沢藩の苦しい台所事情があった。その台所事情が、米沢藩の有名な実学思想、例えば細井平洲の折衷学派などを生み出した。つまり理想（学問）と現実が必ずしも一致し

ないことを米沢藩の人間は身に沁みて知っていた。乙羽とほぼ同年代の米沢出身者に、実業家の池田成彬や建築家の伊東忠太らがいるけれど、彼らの現実主義的な処世術は、やはり米沢藩の実学思想の影響があるように私には思える。そしてそれは、のちに乙羽の大恩人ともなる同郷の先輩、『風俗画報』の創刊者である東陽堂主人・吾妻健三郎についても、また当てはまる（吾妻の経歴および乙羽との関係は後でまた詳しく触れる）。

内田魯庵は回想集『おもひ出す人々』の中で、乙羽と同時期の硯友社の同人北村三啞と乙羽を比較しながら、「乙羽も亦硯友社外の誰とでも交際したのが紅葉の氣に入らないで折々忌味を云はれた。が、乙羽は三啞と違つて如才無い利口者だったから、三啞のように紅葉の機嫌を損じるやうな事は做なかつた」と述べているが、この「如才無さ」こそは米沢藩の実学思想の一つの現われである。そして、「如才無さ」のゆえに乙羽は、芸術家としては大成できな

ったのかもしれないけれど、ひとたび編集者という役割を得た時には、その「如才無さ」つまり八方美人性が、この上ない才能として力を発揮するのである。雑誌『太陽』の小説欄に硯友社の同人仲間ばかりでなく、饗庭篁村や森田思軒をはじめとする根岸派の人々や、さらに系統の異なる樋口一葉、福地桜痴らを起用しているのも、彼の「如才無さ」によるものであろう。そして、明治三十三年一月、乙羽の発案で本邦初のグラフ週刊誌『太平洋』が創刊された時、同誌の主筆をまかされた江見水蔭（助手は西村醉夢）は文学的自叙伝『自己中心明治文壇史』（博文館、昭和二年）で、こう書いている。

大橋乙羽は、硯友社員では有るけれど、そんな狭い範囲にのみ着目せず、各方面から新知識を採用してゐた。赤門から、早稲田からも亦無名の新文士としても、現に西村を入れてゐるのである。乙羽は出版業者と文士及び画家との間にをつて、其連絡をどの位忠実

に計つたか知れなかつた。<sup>(3)</sup>

話を乙羽の経歴に戻そう。明治九年地元の北堤小学校（明治十二年他の三校と合併して興讓小学校となる）に入學した彼は、隣家に住む織物問屋の息子落合文太郎と親しくなつた。二人に共通していたのは、他の子供たちが相撲や芝居に熱中している時に、「かきくら」と称して文章の書き比べに夢中になつていたことである。落合との「かきくら」の縁は、その後も長く続く。明治十三年小学校を卒業した乙羽は、山形市十日町にあつた呉服商富士屋に見習いとして入るが、仕事をっちのけで読書に耽り、しばしば主人から注意を受けた。しかし彼の文学熱は高まる一方で、ついには明治十八年十月二十日、忙しい日々の合間を縫つて、落合らと語らつて、手書きの同人誌『鶴霞叢譚』を創刊する。実際の編集に当たつたのは落合だったが、原稿の清書はほとんど乙羽が受け持った。手書きの同人誌というメディアは、当時の若者たちの眼に、胸おどる先端的なメディアとして映つたに

違いない。ちょうど同じころ、のちに乙羽の仲人となる尾崎紅葉も、山田美妙、石橋思案ら大学予備門の仲間たちといっしょに、手書きの回覧雑誌『我楽多文庫』を創刊している。

文章と並んで乙羽は絵を書くことも大好きだった。のちに『風俗画報』の編集長となり、博文館に移つてからは『太陽』『文芸倶楽部』といった雑誌に積極的に写真を取り入れ、グラフ雑誌『太平洋』を創刊することにもなる彼は、幼いころからヴィジュアルな物に対する関心が非常に強かつた。そんな彼の才を伸ばそうと父親は、同郷の画家に相談したこともあったが、母親の反対にあい、彼は泣く泣く富士屋に奉公に出たのである。

明治二十年春、その母親が不治の病にかかり（父親はすでにその三年前に死去）、それを機に彼は富士屋を辞めた。翌年の夏、彼自身も健康を害し、小野川温泉に療養に出かけた。ちょうどその時、明治二十年七月十五日、磐梯山が大爆発を起し、好奇心



の旺盛な彼は、療養中にもかかわらず、二里の道を歩いて吾妻山上から爆発の様子を遠望したが満足できず、さらに十里の道を歩いて、爆発直後の悲惨な現場を間近かに視察した。その詳細を彼は、地図を添えて地元の「出羽新聞」に発表した。

この記事に目を止め感心していた男がいた。東陽堂主人吾妻健三郎である。

吾妻健三郎は、やはり米沢の出身で、安政三（一八五六）年、上杉家に仕える医師吾妻寿庵の三男として生まれた。明治六年上京し製作学教場（工学校の前身）に入學した彼は、ドイツ人教師ワグネルに興味し数学を学んだ。やがて石版印刷に興味を持った彼は、ワグネルのアドバイスを得て、独力で石版印刷の技術を開発し、やがて三色版を完成させるにいたった。

そのころ、内務省地理局で、東北地図の印刷出版を企画していたが、その彫刻に三年を要する大事業なので躊躇していたのを、彼が引き受けて、わずか六カ月で完成させてしまった。しかも、

その精巧な出来栄えには外国人技師も驚嘆したのである。このことから、地理局の信任を得て、各種印刷を委託されるようになった。

そこで神田駿河台袋町に東陽堂を設立して、各種印刷出版を始めた。その中でも『絵画叢誌』が好評を博した。石版印刷の妙味を如何なく発揮した画期的なものであり、東陽堂は美術出版社としてのゆるぎない地歩を固めていたのである。<sup>(5)</sup>

自分の印刷技術をさらに活かすべく吾妻は、次のステップ、図版を効果的に使った時事的な風俗雑誌の創刊をもくろんでいた。そしてたまたま故郷米沢に帰省していた時、「出羽新聞」に載った乙羽の噴火現場探訪記を目にし、文章もさることながら、その的を射た地図の挿入振りに感心したのであった。さっそく、共通の知り合いである落合文太郎を紹介して二人は出会い、乙羽は吾妻の勧めに従って、明治二十一年九月上京、東陽堂に入社するのである。

こうして翌二十二年二月、本邦初のヴィジュアルな風俗雑誌『風俗画報』が創刊された。このころ乙羽は、やはり東陽堂に縁のあった東北出身の画家寺崎広業と日本橋矢ノ倉で共同生活を始めた。共同生活といっても「広業はなかなか自分の稼ぐ金だけでは食ふことが出来ず、しよつ中、大橋乙羽の援助を受けてゐた」<sup>(6)</sup>（正木直彦『回顧七十年』）。つまり乙羽が東陽堂からもらう月給十五円で二人暮らしていたわけである。明治三十四年六月、乙羽が短い生涯を終えた時、広業はその遺体に取りすがって「乙羽は馬鹿だ、自分の命を亡ぼすまで勉強した」と言つて号泣したという。<sup>(7)</sup> 広業を通じて乙羽は多くの画家たちと知り合った。硯友社の一員でありながら彼が、根岸派の文人たちとも懇意であつた理由の一端は、その辺にもあるのだろう。

硯友社といえば、彼がその同人に加つたのも、ちょうどこの頃、石橋思案と出会つたのがきっかけだった。

明治二十四年、乙羽は、東陽堂に在職の

ま、「東京中央新聞」の記者を兼任し、主に三面記事を担当する。『風俗画報』でも文字通り風俗記事を得意としていた彼は、先の磐梯山噴火の探訪への情熱にも見られたように、良い意味での世俗的好奇心が旺盛だった。こういう資質は、雑誌記者に欠かせない大事な要素であり、『太陽』創刊ののちは同誌の「家庭欄」や「訪問欄」、さらに「雑録欄」を充実させ、一般の読者が親しみを持って雑誌に入っていくための窓口を開き、いわば今日ある総合雑誌の雛形を造りあげたのも（もちろん坪谷善四郎らの功績もあるが）、彼のその資質によるものだ。

しかし乙羽は、翌二十五年になると新聞記者をやめ、再び東陽堂勤務に専念する。そしてこの頃、彼の発案により、しばしば絵画展覧会を企画し、『風俗画報』や「絵画叢誌」の販路を広げて行く。これもまた先に述べた米沢の実学精神の発露であり、かつまた、「方今の文壇多士濟々たりといへども慨ね中等の産ある家に生れて実際の

辛楚を知るもの少ければ乙羽子が経歴の如きは既に珍とするに足る」と内田魯庵が評した。他の文学者たちには見られない特異性でもある。江見水蔭も、先に触れた『自己中心明治文壇史』の中で、先に引用した部分に続けて、「自分が文士生活の窮苦を十二分に知るだけに、どれだけ我々に同情を寄せて呉れたか知れなかつた」と書いているが、樋口一葉の困窮状態を見かねた彼がしばしば、原稿の二重買い等の便宜を計ったのは有名な話であるし、『太陽』が創刊された時、各界の有力者たちから賛助会員をつのり、その強力なメンバーをバックに、雑誌の社会的位置を世間に認知させようとしたのも、たぶん彼のアイデアであつただろう。先に引いた追悼文の中で高山樗牛も、こう述べている。

……子は事務を處理する上に殆ど天稟とも稱すべき才氣ありしを以て、出版社交の事業に盡したところ亦尠からず、隨うて知交上下に遍ねく、文藝社會に事ある時の如きは、子の斡旋に依

頼するところ甚だ多かりき。往年の文學美術家懇親會の如きは、實に子が首唱に起りしものにして、子は是によりて今の藝苑に於ける小黨分立の弊を救はむと欲したるなりき。而して吾等の最も子に感謝すべきことは、子が其の力の許す限りに於て文藝の士を庇保せむと力めたるにあり。<sup>10)</sup>

『風俗画報』の奥付を見ると、乙羽が正式に編集長となつたのは明治二十六年三月号からである。同じ時期彼は、広業を通して、当時の博文館主大橋佐平と知り合い、同年十一月、博文館の「少年文学」シリーズ第二十三編として『上杉鷹山公』を出版する。これを切っ掛けに博文館との縁ができた彼は、翌年、同社の「帝国文庫」から「西鶴全集」が刊行されるに当って、その校訂を尾崎紅葉と共にまかされる。そしてその綿密かつ迅速な仕事振り、さらに勤勉な性格が佐平から見込まれて、最初に述べたように、長女時子の婿となり、同年十二月、紅葉の仲人で時子と式を挙げ同時に博

文館に入館し専務理事兼支配人として手腕を発揮することになる。

当時博文館は大変革期にあった。明治二十七年八月から始まった日清戦争に合わせ『日清戦争実記』を創刊し空前の売れ行きを記録させた同社は、明治二十八年一月号を期して、『日本大家論集』『日本之少年』『明治文庫』をはじめとする十三雑誌を統廃合して、新たに『太陽』『少年世界』『文芸倶楽部』の三誌を創刊した。

その三誌の創刊号の目次を見ると、すべての雑誌に執筆者として名を連ねているのは乙羽は一人であり、その辺にも彼の活躍の幅広さがうかがえる。もちろん、彼が活躍したのは、執筆者としてだけではなく、三大雑誌の総支配人というのが一応の肩書きであつたけれど、さらに細かく、当時の、編集者としての彼の仕事振りを見てみよう。

特筆したいのは、写真を積極的に雑誌メディアに取り入れたことである。彼も編集に携わった『日清戦争実記』が空前の売り

上げを記録した最大の理由に、同誌が、写真師小川一眞の勧めにより、日本最初の写真銅版を使用した点があげられる。その影の仕掛け人は、もちろん、小川の友人で、三色印刷生みの親吾妻健三郎のもとで学んだ経験を持つ、彼、大橋乙羽だった。幼い頃からヴィジュアルな物への関心が強かった彼は、当時徐々に一般化しはじめていた写真を雑誌に取り入れることに對しても、多大な関心を寄せていた。明治三十一年に行なわれたあるインタビュー（素人写真談）で彼は、こう語っている。

私が以前『風俗畫報』をやつて居つた時、最も不自由を感じたのは、時々の繪で以て、例えば本願寺坊主が死んで西京へ往くとか何とかの時、繪を描く事を覺えたらば實況を寫すに便利だらうと、思ひましたが今から繪の稽古をしたつて、よしんば少しは描けるにしても咄嗟の間に寫生は出來ぬ。何か無いかと思ふうちにポツ／＼世の中に寫眞が盛んに成つたんですな。其れで明

治廿六年の夏時分に、妙義山から越後を旅行して歸つて来て、文章に書いても充分に景色を現はす事が出來ないから、始めて寫眞の必要を感じましたが、貧書生の身分で器械だけでも百圓や二百圓はかゝるから、到底資力が無かつた、連りに社主に勧めて買はせようとしたが、容易に承知して呉れなかつた、處で夏休に社主が越後へ行くに就いて、始めて和製の廉器械を提げて往つたが、如何いふもんか成功しなかつた、左様して居るうちに博文館に来て『太陽』の挿繪をやるに就いて、諸方から集まる寫眞ばかりでは往かん、種々な雑誌を合せると、月には五百枚、年には六千枚も要るが、日本に一萬枚の成功した種板を持つて居る者は殆ど無いので、自分で撮らなくちゃ成らない譯に成つた、其れから一層勉強して、二十七年の暮から始めて、今では最早三四千枚の種板を撮つて居ます<sup>(12)</sup>。

乙羽の上司で、編集部門の総責任者だつ

た坪谷善四郎も、雑誌『太平洋』（明治三十四年六月十八日号）に載せた乙羽への追悼文「嗚呼乙羽君」で、こう書いている。

……君の特長のひととして知らるゝ寫眞術も元來何人にも學びしこと無し、明治二十八年の夏頃から、僅にカビネ形の器械に二ツ折れの三脚を買い、爾來南船北馬唯だ之を友とし全く獨習を以て之を利用し或る時は三陸海嘯の實況を撮影して、恐くも乙夜の覽に供し、或る時は英照皇太后の御大葬に陪して、盛儀の光景を描寫し、凡そ社會に重大事ある毎に、寫眞して其の狀を報ずること、日本に在ては君によつて始められた。<sup>(13)</sup>

ではその寫眞術を、そして自ら寫した、あるいは小川一眞をはじめとする友人たちが寫した、寫眞を、彼はどのように雑誌に活用したのであろうか。

日清戦争時のナショナルリズムの氣運をバックに創刊された『太陽』は、しばしば、『軍艦や皇族や大臣の寫眞を口繪として載

せた<sup>(14)</sup>」が、先のインタビューでも、続けて、「博文館へ來ても圖書雑誌の表紙と口繪、製本の舐裁、なんか大抵私が擔任してやつて居る<sup>(15)</sup>」と答えているように、これらの寫眞の選択は、ほとんど彼にまかされていた。こういう彼の編集方針を「体制寄り」と言つて批判することはたやすい。しかし苦勞人だった彼は、総合雑誌というものは、ある程度世間の動向に合わせ、しかるべき社會的認知を受け基盤がしっかりしたところで初めてメディアとして機能して行くことを知っていたのだらう。口繪に皇族や大臣の寫眞を使い、社會のある部分のコンセンサスを得ようとする彼の編集者としてのセンスは、東陽堂時代に絵画の展示即売会を企画したり、明治二十九年一月に各界の著名人を集めて『太陽』の「名譽贊成員」を組織したりするセンスに通底している。

『太陽』の口繪が最もはなばなしかったのは、創刊五年目の明治三十三年（つまり『太平洋』が創刊された年）の各号である。『太陽』はしばしば判型を変えたが、この年、菊判を菊倍判に改め、翌年になるとまた元のサイズに戻している。この年の『太陽』は、菊倍判という大型サイズをいかした口繪処理が行なわれている。試みに一月号を例にとれば、板垣退助、大隈重信の肖像寫眞から始まる合計十二頁。内容はきわめてバラエティーに富み、「初春」と題して各地の季節寫眞を一頁に四点散らしてみたり、ムリリヨの絵画「耶蘇の家族」を一頁まるごと使つたり、あるいは「海内四奇勝」や「東京三大呉服店」という組寫眞を載せたりしている。海外ものも充実していて、「北米偉觀」を初めとする三頁九点。庄巻は「緬甸國風俗及風景」と題したビルマの先住民たちの生活振りを紹介した頁である（二頁八点）。そして最後に、当時博文館のあった「日本橋初頭の新年」という、たぶん乙羽自身の手になる寫眞を載せているのがほほえましい。

大隈重信や板垣退助、山県有朋といった大物たちの肖像寫眞を巻頭で大きく取り扱ったのは、もちろん、雑誌の權威づけのため

めでもあったが、それらの写真は世間の話題を呼ぶことが、たびたびだった。中でも注目を集めたのは、明治三十年一月二十日号で、「其頃犬猿の觀あつた伊藤山縣の兩元老を、同じレンズの中に収めた」<sup>(16)</sup>ことであり、さらに臨時増刊号の『明治十二傑』（明治三十二年六月）に載せる肖像写真を撮影するため大磯の伊藤博文別邸を訪れ（同年四月四日）、たまたまそこに居合わせた大隈重信と伊藤を並べて写した時には、「まだこの寫眞を發表しない前にその事が世間に知れ渡り、從來相容れぬ兩公が共に並んだ寫眞を寫したのは必ず政界に異變の生ずる前提だろう」<sup>(17)</sup>と新聞が騒ぎ立てたという。

雑誌に肖像写真を活用したのは、こういう硬派な形でだけではない。『太陽』と同時期に創刊された『文芸倶楽部』の明治二十九年二月二十日号（第二卷第三編）の巻頭口絵には、「東都美人」「京都美人」「長崎美人」「熊本美人」「金沢美人」と題して五頁三十三人もの芸者たちの肖像写真が掲

載された。まさに圧巻ともいえるこれらのきれいだころのブロマイドが世間の度肝を抜いただろうことは、想像に難くない。たぶん評判も悪くなかったのだろう、それから数号にわたって『文芸倶楽部』の口絵は、こういう傾向のものが続くことになる（憶えておいていただきたいのは樋口一葉の「たけくらべ」が乙羽の世話で、いっきょ再掲載されたのも、この内のある号である）。

乙羽が興味を持っていたのは肖像写真だけではない。旅行好きで紀行文作家としても有名だった彼は、数多くの風景写真も残している。それらの写真は、しばしば『太陽』の口絵を飾り、のちに『千山萬水』正統（博文館・明治三十二年・三十三年）や『欧山米水』（博文館・明治三十三年）といった彼の旅行記がまとめられた時にも大いに活用された。

しかしジャーナリズムとの関係で言えば、画期的だったのは、先の坪谷の一文も触れていたように、明治二十九年六月、死者二

万七千人を越える三陸海嘯が起った時のことである。かつて磐梯山の大爆発に際して十二里の道を歩いて噴火現場に行き、その詳細な記録を地図を添えて新聞に発表した経験のある乙羽は、この時もジャーナリストとしての血がさわぎ、六月十五日夜、事故の一報を聞くと、「自ら寫眞機械を携へて十八日東京を發し、親しく被害地を跋涉して、具さに慘狀を撮影して歸り」<sup>(18)</sup>、『太陽』七月五日号（當時同誌は月二回発行）に十数頁にわたって掲載した。

東北出身である乙羽は、この大海嘯の慘狀を人ごととは思えず、被災地の義捐のため、『文芸倶楽部』臨時増刊「海嘯義捐小説」を刊行し、その純益を寄付した。同増刊には広津柳浪、川上眉山、内田魯庵らを初めとする当時の流行作家や新進鋭四十名あまりが作品を寄せたが、中にはデビューしたての小栗風葉や、まったく無名の徳田秋声たちも混じっていた。彼らは乙羽の特別の引きによるものだった。

この例からもわかるように編集者乙羽を

語る時に欠かせないのは、その新人発掘能力と面倒見の良さ、そして幅広い交友関係である。この点でも乙羽は、まさに天性の編集者だった。乙羽の庇護を受けた新人に、風葉や秋声だけでなく、一葉がいる、鏡花がいる、花袋がいる、そして樗牛がいる。

金銭的に困っていた一葉に乙羽がしばしば援助の手をさしのべたのは有名な話である<sup>(19)</sup>し、無名時代の鏡花は小石川の乙羽の自宅に同居し博文館の『日用百科全集』の編集を手伝い糊口をしのいでいた。『太陽』創刊号に載った紅葉の小説「取舵」を代作出来たのも乙羽の世話による。

花袋の乙羽への思いは複雑だが、それでも彼は自伝『東京の三十年』の中で、「しかし、何の彼<sup>か</sup>のと言っても、乙羽君は私に取って恩人だ。私の『日光山の奥』の一文を『太陽』に載せてくれたのも、一廉<sup>ひとかど</sup>の紀行文家にしてくれたのも皆乙羽君の周旋であつた<sup>(20)</sup>」と書いている。乙羽は花袋を小説家として認めていなかった。しかし紀行文家としては一流であると評価していた。こ

の編集者乙羽の眼力は、あくまで正しい。

大学入試程度の近代日本文学史の知識の持ち主に『太陽』と言えば樗牛の「日本主義」とすぐ答が返ってくるほど、樗牛高山林次郎と『太陽』は切っても切れない縁があるけれど、その縁を作ったのも、やはり乙羽である。明治二十七年「瀧口入道」を書いて読売新聞の懸賞小説に当選した樗牛は、翌二十八年、その年に創刊された『帝國文学』の編集委員となり、近松門左衛門等についての研究論文を発表していた。同じ山形の出身である乙羽は、樗牛に注目し、まだ帝国大学に在学中であつた彼を『太陽』に登用し、同年七月号から文学欄に無署名のコラムを連載させた。この連載が一年余り続いたのち樗牛は帝大を卒業し、仙台の二高に教授として赴任、いったん批評家としての活動を中断する。しかし二高での生活に退屈した樗牛は、乙羽の熱心な招きに応じて野に下り、明治三十四年四月博文館に迎え入れられ、同年六月には『太陽』の編輯主幹となった。彼が「日本主義

を賛す」を発表したのは、同年六月二十日発行の『太陽』第十三号においてであり、ここに明治三十年代後半『太陽』のいわゆる「太陽調」の論調スタイルが確立されて行く。その仕掛け人が、いわば乙羽だったのである。

乙羽の交友関係の広さは文学界や画壇だけにとどまらなかった。先に名前をあげた大隈や伊藤、山県という政界、財界、学界、そして軍人にいたるまで、特に大物と言われる長老たちが彼に対して胸襟を開いた。だが乙羽は、「それを併し淺薄なるホコリの一ツとしやうとしたのではなく、斯くして文藝と元老とを親密ならしめやうと計つたのに他ならぬ<sup>(21)</sup>」と江見水蔭も『自己中心明治文壇史』で書いている。

明治三十三年六月パリで開かれた万国著作権会議に出席することを目的とした慌しい欧米訪問旅行の無理がたたって、翌三十四年六月、悪性のインフルエンザから肋膜炎を併発して、乙羽が、三十二歳の短い生涯を終えた時、その追悼集会で、当時の陸



軍医総監石黒忠憲は、「軍医総監の正服に、胸間限なく内外国の勲章を輝かして登壇」して、「乙羽君は多方面の長所を具したる中に、余は殊に其の交際に長し何人にも愛せられたるに服す<sup>(22)</sup>」と語った。そして同じ会の席上で徳富蘇峰は、こういう追悼の言葉を、乙羽の霊前に捧げた。

泰西人曰く、生活は一の技術なりと。

予は曰く交際も亦た然り、朋友を作るも、敵を作るも、其人の手並如何にあり。乙羽子の如きは、友人を作るの道に於て、殆ど圓滿に近かゝりき。技術と云へば何か謀略や、細工の様に思はるれども。そは其同情の博く、親切に、謙和に、且つ相得て狎れず、忤らざる練達の才による也。

予は博文館主が、乙羽子を發見したる眼識に敬服せざるを得ず。而して子が其の知遇に答へたる亦た多大なるを信ず。文運の隆盛は、作者と出版者との協戮に待たざるを得ず。乙羽子の如き、半面作者たり、半面出版者たる人にし

て、博文館の事に幹たれば、其の兩者の情意を疏通するに於て遺憾なきに庶幾かりしならむ。今や亡し、惜む可き也。<sup>(23)</sup>

近代日本の出版文化史の上で、編集者という職能がクローズ・アップされて行くのは、冒頭でも述べたように、中央公論社の滝田樗陰以降のことである。しかし、乙羽大橋又太郎の持っていた編集者としての可能性を考えた時、彼があとせて十年長生きしたならば、話を文学史という狭い範囲に限定しても、例えば明治三十年代末から四十年代にかけての『太陽』が単なる自然主義文学の牙城となることもなく、文学史の流れは大きく変わっていただろう。

もちろん、博文館という出版社も、明治大正期でその黄金時代を終えることなく、さらに輝かしい存在として後の時代まで屹立していたはずである。

大橋乙羽こそは、近代日本出版文化史の上で、「最初の編集者」と呼ばれるにふさわしい人物だったのである。

## 注

- (1) 滝田樗陰の生涯と業績については杉森久英『滝田樗陰』（中公新書・昭和四十一年）参照のこと。
- (2) 「明治文学全集98」「明治文学回顧録集（一）」（筑摩書房・昭和五十五年）二五三頁。
- (3) 江見水蔭『自己中心明治文壇史』（博文館・昭和二年）三一五頁。
- (4) ただし岸上の「大橋乙羽君」では明治十五年となっている。
- (5) 上村良作「石版印刷の先覚 吾妻健三郎」『米沢風土記』第三集（米沢市役所・昭和四十八年）七一頁。
- (6) 正木直彦『回顧七十年』（學板美術協會出版部・昭和十二年）二七頁。
- (7) 江見、前掲書三五三頁。
- (8) 「明治文学全集22」「硯友社文学集」（筑摩書房・昭和四十四年）三六二頁。
- (9) 江見、前掲書三五三頁。
- (10) 『太陽』明治三十四年七月五日号三九頁。
- (11) 鈴木正節『博文館「太陽」の研究』（アジア経済研究所・一九七九年）によれ

ば、明治二十七年八月十五日発行の同誌第一編は二十三版を重ね発行部数は三十余万冊に達したという（同書七頁）。

(12) 大橋乙羽『名流談海』（博文館・明治三十二年）二五四頁。

(13) 『太平洋』明治三十四年六月十八日号三頁。

(14) 伊藤整『日本文壇史』新装版第四卷（講談社・昭和五十三年）二五八頁。

(15) 大橋乙羽、前掲書二五七頁。

(16) 江見、前掲書三五四頁。

(17) 坪谷善四郎『博文館五十年史』（博文館・昭和十二年）一三七頁。

(18) 同右書一〇八頁。

(19) 例えば西川祐子『私語り樋口一葉』（リブポート・一九九二年）一九九頁から二〇四頁にかけて参照。

(20) 田山花袋『東京の三十年』（岩波文庫・昭和五十六年）九五頁。

(21) 江見、前掲書三五四頁。

(22) 『太陽』明治三十四年八月五日号二二四頁。

(23) 同右二二三頁。